

野球部員における年度別成績の比較検討

白根 弘也

Comparison Examination of The Results by Year in a Baseball Member

Hiroya SHIRANE

(2002年11月29日受理)

Generally, the more an athlete gains game experience, the more capability goes up him. However, the player who is regular and is participating from the first grader is considered that there is a certain cause when the results in the 2nd year are less than the previous year. In this research, the results by year are compared and the necessity for instruction of those other than technology is explored.

1. はじめに

硬式野球部の年間活動は、大まかに言うと、シーズン中が技術練習を中心としたチーム練習と練習試合、そして大会参加となっている。また、シーズンオフは筋力トレーニングなど各種トレーニングを中心として進めている¹⁾。入学してきた1年生は、毎日の練習で技術を習得しながら、出場機会があるときには練習試合で経験を積んでいる。1～3年生チーム（以下高野連チーム）では、夏の甲子園予選後に3年生が抜けると1年生が常時試合に出場する機会が多くなり、練習試合や大会での大舞台でさらに経験を積み、入学時よりも野球選手としてのレベルが確実に上がる。また、大会結果をもとに次年度につながるための目標を掲げ、シーズンオフにはトレーニングに励んで体力・精神力の強化を図っている。

高野連チームの選手の特徴として挙げられることは²⁾、入学以前は硬式ボール（以下硬球）を経験していないので、入学当初の1年生は、はじめは硬球での高校野球のスピードになかなかついていくことが難しい。また、体力的にも高校野球に対応できる筋力が備わっていないので、無理をすると怪我をすることが多い。したがって、入学してすぐの1年生がレギュラーポジションを獲得するのはどの高校でも容易ではないと思われる。しかし、毎日の練習・練習試合での技術や経験などを身につけていくことで、硬球にも慣れ、夏の甲子園予選や1, 2年生での秋季大会を目指した新チーム（以下新チーム）頃には、頭角を現して常時試合に出場する1年生も多くなっていく。

2. A選手について

さて、秋田高専硬式野球部の選手について話題を移すと、本校硬式野球部も、入学当初の新入部員は技術的・体力的に上級生に劣る部分があり、入学してすぐにレギュラーポジションを獲得することは難しい。しかし、現在の高野連チーム（新チーム）の主力メンバーに、1年生の5月からレギュラーポジションを獲得した選手（以下A選手）がいる。A選手は小柄でパワーヒッターのタイプではないが、足が速く守備範囲が広い。さらに中学校時代は地区大会で優勝し、全県大会の舞台を踏んでいたので野球選手としてのセンスが備わっていた。

A選手は1年生時の夏の甲子園予選、新チームの秋季大会、2年生時の春季大会、夏の甲子園予選、そして今回の新チームでの秋季大会と、数多くの試合に出場した。その間、毎日の練習で技術・体力を向上させ、体つきも入学時に比べて確実に一回り以上大きくなった。さらに試合でたくさんの経験をし、状況を自分で判断して守備位置の確認やカウントバッティングなどできるまで成長した。

順調に野球選手として成長してきたA選手であるが、今シーズンを終了して、A選手、筆者共に感じたことがあった。それは、1年目と2年目の新チーム時の打撃成績を比較したときに、2年目の方が記録上伸び悩んでいるのではないかということであった。経験を積めば積むほど成績が上がる²⁾のが一般的な理論であるが、今回成績を数字で表して比較したときに、はっきりと分かるのではないか。また、その記録の差には必ず理由があるのではないか。

今後指導していく上で具体的なアドバイスができるよう、細かいところまで打撃成績を分析し、検討してみた。

3. A 選手の打撃成績（新チーム時）

3.1 年度別打撃成績

表1 A 選手の年度別打撃成績の比較

項目・年	H13（1年）	H14（2年）
打 数	61	73
安 打	18	21
打 点	10	2
三 振	8	14
四死球	5	18
犠 打	5	2
二塁打	0	2
三塁打	1	0
本塁打	1	0
盗 塁	10	19
打 率	. 295	. 288
出塁率	. 348	. 440
試合数	20 試合	22 試合

3.2 塁上ランナー別の結果

表3 塁上ランナー別の打撃結果（H14）

塁上ランナー・結果	ヒ ッ ト	四 死 球	ア ウ ト	三 振	犠 打	そ の 他
ランナー無し	11	7	20	5	0	1
ランナー1 塁	4	3	4	2	1	0
ランナー2 塁	3	2	4	2	1	0
ランナー3 塁	0	0	1	2	0	0
ランナー1, 2 塁	3	1	2	2	0	0
ランナー1, 3 塁	0	1	0	0	0	0
ランナー2, 3 塁	0	1	2	1	0	0
ランナー満 塁	0	3	2	0	0	0

注1) ヒットは2塁打を含む。

注2) アウトは三振以外のフライ、ゴロによるアウト。

注3) その他は相手エラーによる出塁。

表3でまず気付いたのが、ヒットの半数以上がランナー無しの場面だったということである。ランナーがない場面ではリラックスして気楽に打てるのだが、得点圏にランナーがいると、目に見えない緊張感を覚えるのではないかと。特に3塁にランナーがいるときには1本もヒットが出ていない。得点圏打率が通算の打率より低いのは、技術よりも精神面の問

表2 A 選手の試合出場時打順（H14）

打 順	試 合 数
1 番 打 者	9 試 合
2 番 打 者	8 試 合
3 番 打 者	2 試 合
途中出場	3 試 合

表1で着目すべき点は、打率はさほど変わっていないのだが、出塁率が大幅に上がったということである。その要因が四死球での出塁で、18個も四死球を選べるということは、選球眼が以前よりかなり良くなったと言える。これは、試合での経験による選手としてのレベルアップと言えよう。また、表2とも関連できるのだが、出塁率が高いことは1番打者の役割³⁾を十分に果たしていることになる。これだけ見ると、チームに貢献していることがはっきりと分かる。しかし、A選手、筆者共に感じた伸び悩みは、打点の数と三振の数にあった。特に打点の数はチャンスに打てたかという目安にもなる。また、チャンスに三振を喫したときにはましてイメージが悪くなったのではと考える。では、どの場面でのどのような結果を残したのか。さらに細かく各打席での結果を追ってみた。

題であるとする。また、三振の半数が得点圏にランナーがいるときであったので、チャンスに打てていないという筆者らの感じたことがこれで証明された。

また、四死球について分析すると、5度ほど満塁の場面を迎え、3度四死球を選んでいるということは、ここでも打って帰そうという気持ちよりも次の

バッターにつながうという気持ちが働いていると考える。選球眼が良くなった分、自分のねらい球が絞られきり、積極性が低くなったのではないかと。

では、A選手はどのカウントからバッティング

を行ったのか。カウント別にバッティング結果を表し、積極性など精神面に関する指導ができないものか、さらに追究してみた。

3.3 カウント別の結果

表4 カウント別の打撃結果 (H14)

カウント・結果	ヒット	2 塁 打	四 死 球	ゴロアウト	ライナーアウト	フライアウト	三 振	犠 打	その 他
0-0	3	1	1	6	0	2	0	0	0
0-1	0	1	1	0	0	0	0	0	1
0-2	0	0	1	1	0	0	0	0	0
0-3	0	0	3	0	0	0	0	0	0
1-0	3	0	0	1	0	3	0	0	0
1-1	5	0	1	5	0	1	0	1	0
1-2	0	0	0	4	0	2	0	1	0
1-3	1	0	5	0	0	2	0	0	0
2-0	1	0	0	1	0	0	2	0	0
2-1	1	0	0	1	1	0	5	0	0
2-2	4	0	0	0	0	1	4	0	0
2-3	1	0	6	2	0	2	3	0	0

注1) カウントは (ストライカーボール) の順。 例: 1-2 1ストライク 2ボール。

注2) その他は相手エラーによる出塁。

まず、長打 (2 塁打) は初球か 0-1 という全く追い込まれていない場面で打っているという結果に着目したい。思い切りのいいスイングが長打を生み出す要因になるので、初めにねらい球が来たら積極的に打っているということが実証された。また、2ストライク後のヒットがすべてのヒットの3割以上を占めていることから、カウントによってバッティングのスタイルを変えるカウントバッティングが実行されているということが言えよう。さらに、並行カウント (1-1, 2-2) でも計9本のヒットを放っていることから、精神的な追い込まれ方は、カウントの追い込まれ方よりもランナーを返さなければという気負いの方が強いことが分かった。

また、バッティングの機会が1番多いカウントが2-3であることにも目を向けたい。これは、相手投手に対して球数を最低6球以上投げさせていることである。逆に言うと、相手投手は簡単にはA選手を打ち取れないと感じているということではないか。このことでも1番打者の役割を果たしていることが証明された。

4. A選手への今後の指導

今回の成績を分析することによって、1つの結論が出た。それは、来シーズンのチーム構想として、A選手を1番打者に固定することである。トップバッターとしてリラックスして打席に入り、相手投手により多くの球を投げさせ、出塁したら盗塁でどんどん次の塁を狙わせる。出塁率が4割を超え、盗塁ができる選手は相手にとってはやっかいな選手である。筆者が相手チームの監督であれば、絶対にこのような選手は絶対に塁に出したくないと感じてしまう。そのような存在であることを、まずA選手に伝えたい。自分の役割は「自分でランナーを帰す」のではなく、「自分がランナーとして帰る」のだということ、四死球で出塁してもヒットと同じであること、1番打者は打率よりも出塁率が重要だということを確認させたい。

また、得点圏にランナーがいる場面では、カウントが追い込まれていてもヒットが3割ほど打てていることから、つなぐためのバッティングを心がけるよう、指導していきたい。この指導については、最近さまざまなスポーツでメンタルトレーニングの重要性⁴⁾が語られるようになってきたので、シーズン

オフを利用してメンタルの強化に取り組んでいきたい。

5. まとめと課題

今回の研究では、ある特定の部員の成績を数字として表したことによって、具体的な指導方法を見いだすことができた。そして、チームとしての役割も明確にでき、来年度の起用法も確立することができた。しかし、チーム全体の打線のつながりを明確にするためには、この個人記録を部員全体に広げる必要がある。30数名の記録を今回のようにすべて打ち出すのはとても容易なことではないが、打線がつながれば得点力がアップする、そのためには有効な方法だということが分かった。各選手の能力を最大限

に発揮させることが指導者の役割だと思うので、今回のような分析を今後も続けていきたいと思う。また、来シーズンはこの研究が活かされるよう、現場指導をしっかりと行っていきたい。

参考文献

- 1) 立花龍司, 「野球のトレーニング練習法」西東社, pp.114~119, 1998
- 2) 白根, 秋田工業高等専門学校研究紀要第37号, pp.125~130, 2001
- 3) 田尾安志, 「実践野球教室」小学館, pp.64~65, 1998
- 4) 高畑好秀, 「野球の最新練習法」主婦の友社, pp.102~117, 2002